

橋本淳『セーレン・キェルケゴール 北シエランの旅—〈真理とは何か〉—』書評

森田 美芽

我が国におけるキェルケゴール研究の第一人者である橋本淳氏による、新版キェルケゴール原典全集 *Søren Kierkegaards Skrifter**¹ (以下SKS) に基づくキェルケゴールの若き日の北シエラン旅行に関する記述の翻訳とそれに対する精密な注と解釈に加え、若き日のキェルケゴールに対する論点をまとめたものである。

筆者はキェルケゴール研究において、デンマークの言語と文化を背景に、キェルケゴール自身の精緻な伝記的研究に基づく彼の思想理解を早くから提唱し、実践してきた。『キェルケゴールにおける「苦悩」の世界』において、キェルケゴール研究における「著作活動全体という総合的視座、伝記的および精神史的背景を顧慮しての客観的な歴史的作業、それに基づく積義的な基礎研究」*²を中心とする方向での研究方法が必要であることを提示し、デンマーク語の一次資料からの翻訳のみならず、キェルケゴールの生きた時代とデンマークの歴史、風土を含めた研究において常に第一人者であった。その成果が遺憾なく発揮されたのは、『キェルケゴールの日誌』*³の翻訳出版である。ただし、この時は第一巻「永遠のレギーネ」と題された巻が公刊されたのみであった。また『逍遙する哲学者』*⁴において、デンマークの歴史や風土を踏まえた彼の生涯の伝記的事実と関わりを、詳細な現地での取材を基に構成している。ただ

*¹ *Søren Kierkegaards Skrifter*, ugd. af Søren Kierkegaard Forskningscentret, Kbh, 1997-2013

*² 橋本淳『キェルケゴールにおける「苦悩」の研究』56頁、未来社、1976年

*³ 橋本淳訳編『セーレン・キェルケゴールの日誌 第一巻 永遠のレギーネ』未来社、1985年

*⁴ 橋本淳『逍遙する哲学者』1979年、新教出版社

し、そこには北シェランに関する風土の記録はあるものの、有名な「ギレライエの日記」についてはほとんど触れられていない。そうした意味で、今回の「北シェラン日記」は、キェルケゴールの青年期の、とりわけ母や家族の死による苦悩とそこからの彼の精神的転換を示す一次資料として、橋本氏も長年温め、課題としてきたのではないだろうか。

キェルケゴールは1835年6月17日から8月22日（または23日）までの期間、馬車で北シェランのギレライエに向かい、約2か月の滞在生活をした。そのさなかに「自分にとっての真理」についての記述を残す。これはキェルケゴールを「実存哲学」の典型とみなす形で用いられてきた。しかし橋本氏は彼を「実存哲学者」と決めつけることには異を唱え、「首都コペンハーゲンで生まれ育った都会の若者に、自然がもつ美しさやその懐の豊かさを初めて教え、閉ざされた心がほぐされ、傷ついた魂をうるおし、崩れかけた精神が再び均衡を回復するうえで役立った」*5（6頁）と言われるような、若き日のキェルケゴールの精神的変容の全体像を追おうとする。

筆者は、この日記の収録されたSKS17及びSKSK17*6より、当該箇所に対する全訳を行い、さらに筆者の研究論文や考察を加え、キェルケゴール像を新たにしようとしている。

＜資料としてのSKS翻訳の意義＞

まず、キェルケゴールの北シェラン旅行のテキストは、AA1～AA12と番号が打たれ、その中のAA12が特に有名だが、それもAA1から順を追って見ていくことにより、キェルケゴールの文体、この旅の間の心の動きがつぶさに理解される。

AA1はギレライエに滞在中に、近郊の町や村を訪ね、その中のティズヴィレにある「ヘレネの泉」にまつわる伝説とそれに関わる地元の風景、人々がその信仰を商売にしていることを嘆きつつ描いている。たとえば「いまこの高台に立ち、碑文の言葉を思い、足もとで咲くソバの花に見とれ、まわりに風物に目

*5 以下本書よりの頁は（ ）で記入。

*6 SKS, *bd17, red. af Niels Jørgen Cappelørn, Joakim Garff, Jette Kundsén, Johnny Kondrup, og Alastair McKinnon*, København 2000

をやると、下の谷あいにはティズヴィレの街が見え、そこでは優しく微笑む自然に触れる。」(26頁)というような、自然に触れての描写が目を引き。

AA2は7月5日の日付があり、「グーアの城を訪ねた」と記される。(31頁)そこには「午後の日差しを浴びてこの光景に見とれていると、太陽はなお中天にあってここでの優しい風物に濃い縁どりを描き、まわりのものすべてが声をそろえ、それをもつれた口調でなく明瞭な声で囁くかと思われる、ここにいるのはよいことです、と。」(31頁)というような、自然を描写しつつ自分の心象をそこに投影するような文章に出会う。

AA3でヘルベックへの道をたどり、森の中での情景が描かれる。(33頁)

AA4、AA5では、7月8日にエスロムへ馬車で遠出し、その途中で激しい雨に逢い、地元の人々の家に一時避難させてもらい、その生活ぶりや家の様子をつぶさに描いている。(34-5頁)

AA6 7月29日の日付が記され、クローを出て高台のギルベア(彼がこのうえなく愛した場所の一つ)で、静かに海を見つめながらの回想がなされる。やさしかった亡き人びとが目の前に甦り、姿を見せて喜ぶという錯覚を抱いたのち、一人佇む自分に気づき、こう語る、「しばしばそこに立って私は、過ぎた過去をふり返り、私の身边でおきたさまざまなこと、狭量な心のあまりしばしば人生を害ねた数々を思う。…(中略)…すると私は事柄をこれまでと違って解釈するよう迫られ、思うことは、これまで幾度となく誤解していて、だから人を許すのでなければと思う。」(37頁)のように、ここに至るまでの彼の家族との葛藤が偲ばれる文章が出てくる。また彼の文体として、自然や風景を見ながら、自分自身に帰っていく、その意識の相互性の感覚が顕著である。

AA7は1835年7月25日の日付で、ヒレロズで森を散策し、美しい湖に出会い、自然の中で祈りに導かれるさまが描かれる。AA8は7月27日、28日にリュンビュー牧師の従兄と共にスウェーデンの村を旅したことが記される。(42頁)

AA9は8月4日にリュンビュー牧師を訪ね、セボアの湖に出かけたことが記される。(43頁)。AA10は、ギレライエの独特の風習などについて短く語っている。(45頁) AA11は、農民の中で出会った優秀な人物について触れているが、途中で切れている。(46頁)

AA12のテキストが最も重要である。これは前後半に分かれており、それぞれの日付も内容も異なっている。まず前半部は1835年6月1日付の手紙であり、この手紙の宛先は、ペーター・ヴィルヘルム・ルン、2人の姉の嫁いだ兄弟の末弟である。キェルケゴールはルン宛に尊敬を示し、いま自分の置かれている状況、精神状態を率直に語っている。「私の実存の不幸は、あまりにも沢山な物事へ関心が向かい、どれかに決められないことです。一つのものへと自分の関心を集中できず、すべての関心事が同等に立っています。」(49頁)として、自然科学と神学について述べるが、途中「若干の欠落」(52頁)があり、その後、神学の国家試験を前に、「この試験勉強にはまったく関心がなく、一向に捗りません。」(53頁)と語っている。さらに欄外の加筆がある。

AA12の後半部は1835年8月1日の日誌で、ここでこれまでの牧歌的な叙述は消え、自分自身の問題について正面から向き合う。「もともと私に欠けているのは、私が何をなすべきかについて、自分自身に明確となることであり、たとえ認識が個々の行為に先立たねばならないとしても、何を私が認識すべきかという〔客観的な〕事柄ではない。…(中略)…肝要なことは、私にとって真理であるような真理を見出すことであり、私があるために生きそのためには死んでもよいイデー〔理念〕を見出すことである。」(55-56頁)という有名なフレーズが出てくる。それらは繰り返し、畳み掛けるように、「自己自身」という問題を明らかに示していく

彼自身の苦悩の軌跡、そのころの混乱についても「私は認識の深みで投錯地を求めてむなしくさまよったように、享楽の果てしない大海でも同じようにさまよった。享楽が次々と手を伸べてきて、抗いがたい無力さを覚えた」(59頁)という風な記述に見て取れる。「思うに私は、知の盃を上げて飲んでいたというよりはその中で溺れていたに過ぎない。」(59頁)しかしこうした混乱の中で、彼は客観的な認識の道を求めながら、それとは異なる方向、「まず自分自身を内的に理解して、そこから前へと進路を取る」(59頁)ことに向かっていく。そうした内面性と無縁な人びととの距離を感じ「冷静に自分自身をしっかりと見つめ内的に行動を開始するようにしたい」(63頁)と導かれる。「かくして賽は投げられた—私はルビコン川をわたる！たとえこの道がきっと私を闘い

に導くとしても、決して途中で止めはしない。」(63頁)という有名な一節が結論的に書かれる。

このAA12のテキスト問題について、前半の手紙が、実際の手紙であるとのトゥルストルプの解釈と、フェンガーの「創作説」の葛藤が紹介されている。橋本氏は、パーフォアが最初にここに一つの全体とみて配置した意図に今回のSKSも従っていること、また前半部が手紙の何らかの「草稿」であり、後半部分がその「注解」ともいえる一体性をもつことから、結論として、前半部の関連の上で後半部が書かれたと考えられ、フェンガーの言う「文学的創作」説を否定する。このテキスト問題については、AAの資料全体を見ることで、キェルケゴールの陥っていた苦悩が、まず前の手紙の内容において明らかにされ、それへの自分なりの回答としての後の日記があるという理解ができる。またその当時の彼の葛藤と心の動きがギレライエ文書の全体像によって明らかになることで、今日なお解釈の別れる点に対して、明確な理解が促進されるということが、この訳業の第一の貢献であろう。

<キェルケゴールの自然観>

これらの北シェラン文書の中から、キェルケゴールの自然観というテーマが見出される。橋本氏は、キェルケゴールの自然の描写の正確さに感嘆しつつ、自然科学者と一線を画する彼の自然観について語る。

「自然を前に主・客として対立して向き合うのではなく、まず『自然』に対して自分自身をひらき、『自然』へ向かって自分から語りかけていく。そこから『自然』が語りかけてくる囁きを、心を開いて素直に魂の奥深くで聴き取るようにする。」(299頁)と総括する。

この問題は、まさにAA12前半に現れる。彼はルンへの手紙で自然科学への興味を示しながらも、「これらの人びと[自然科学者たち]は数多くさまざまなことを知っており、多くの新しい事柄を発見しましたが、それ以上ではありません。」(52頁)として、それらの知識のみで満足するのは福音書の富める農夫のごとくだと語っている。それゆえ彼は、自然科学に熱中してきたし今もそうであると認め痛、「しかしそれを私の研究テーマの中心に据えようとは思いません」(53頁)と断言する。

もう一つの視点は、自然と人間の精神である。AA6のテキストに、「大自然のただ中において人間は、おしかぶさる人生の重圧から開放され、大きく息をし、ここで魂は高貴なものを求めて喜ばしく羽ばたく。人間はここで自然の主人公でもあるかのように踏み出していくが、同時に人間は、自然の中に自分を超えた崇高なものを覚え身を屈めねばならない何かを思い、自然全体を支配する力に自分を委ねる必然性を感じ取る。(40頁)」というように、ケルケゴールは、自然に対する人間の卑小さ、自然の偉大さを思いつつ、それを超えたそれを支配する力即ち神を思うという方向に向かっている。これは彼が自然とそれを対象とする学問に対しても持つ意識であると言える。橋本氏はさらに、ケルケゴールが物理学者エアステズに対する姿勢を検討し、最終的にはケルケゴールにとって自然科学と人間の精神の領域を区別するに至る点を指摘している。しかしそうなる前に、こうしたケルケゴールの自然と自然科学に対する姿勢が醸成されていたことは注目されてよい。

さらに別の論考で、「その後、ルビコン川をわたったか?」として、北シェランから帰ったケルケゴールの行動を詳細に追っている。結論としては、決意はしたものの、「浅瀬でためらう」ことになってしまった、というものである。兄も彼も様々な苦境が続く。彼の「世に出る」試みはある意味成功し、ハイペア・サークルの一員となる。彼は神学研究を停止し、ファウスト、ドン・ジュアン、永遠のユダヤ人に関心を示し、文学研究に向かい、また生活も乱れる。こうした彼の浮沈の中で、「大地震」の経験が起こる。この日について、1835年説と1838年説があるが、橋本氏は別の論文に1838年説を採用する考察を示している。従って、彼の「ルビコン川」が渡られた、と言えるのはかなりの月日が経ってからであるとされる。こうしたケルケゴールの若き日の苦闘を正確にかつ彼の人生の全体から捉えなおす試みとして、本書は貴重な意味を持つと言えるだろう。

わずかな瑕瑾というべきものだが、322頁に「一八三五年五月五日の満二十五歳を迎えた日」とあるが、ここはせっかく「大地震」の年齢についての二説の比較の論考であるから、残念というべきであろう。